

週

刊

1959年1月31日第3種郵便物認可(月615円郵便160円、会員は会費に含む)

# うたごえ新聞

12/6

(2004年)

N.O. 1956

THE SINGING VOICE  
OF JAPAN (UTAGOE)  
日本のうたごえ全国協議会機関紙  
うたごえ新聞社  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36  
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105  
E-Mail:journal@utagoe.gr.jp  
http://www.utagoe.gr.jp/journal/  
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行

# 2004年の祭典におけるおきなわ

# 太陽の光あびて



## 芸能の島の命薬

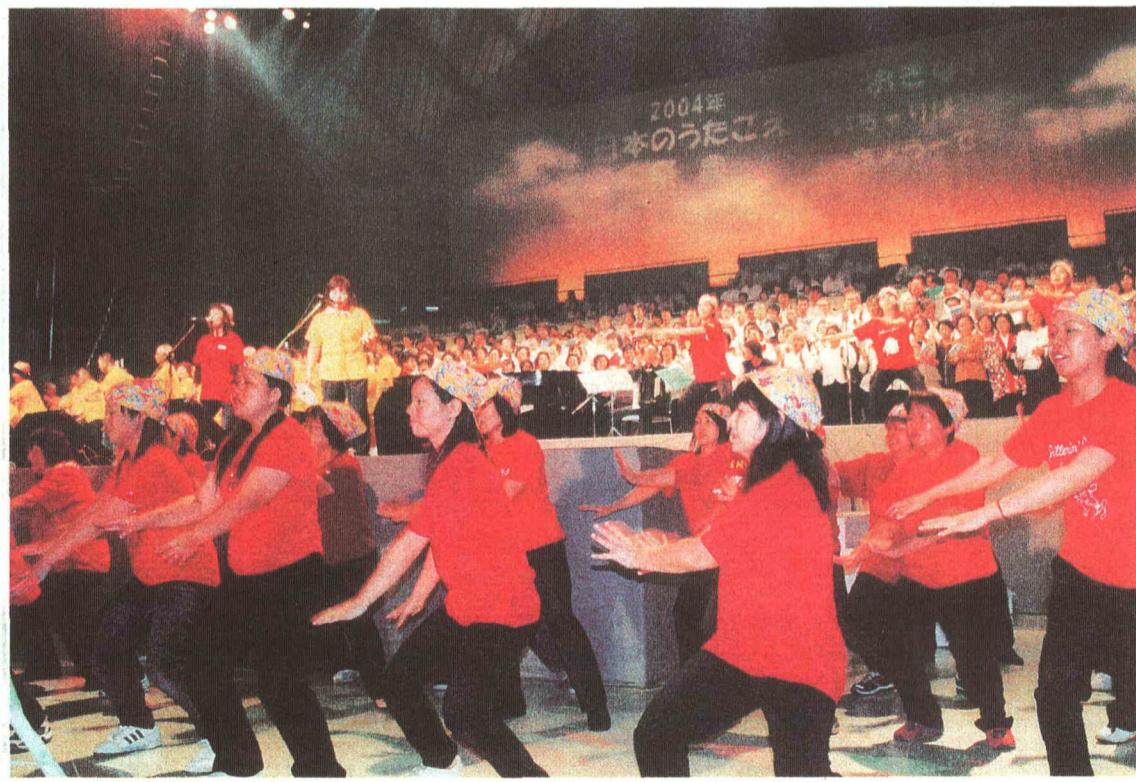
ぬち ぐすい  
11月20~23日、沖縄コンベンション他  
のべ13000人の調べ

日本のうたごえ運動にとって沖縄での日本のうたごえ祭典開催は長年の念願であった。その、2004年日本のうたごえ祭典inおきなわが先月20日から23日、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターを主会場に、のべ13000人が集い開かれた。祭典は、沖縄の太陽(ていだあ)と、

芸能・文化の島の「命の葉(ぬちぐすい)」を浴び、また、全国の憲法九条をまもり、広げようという熱い思



# 平和の風吹かす



写真は大音楽会より。①オープニング、野村流伝統音楽協会による「四ツ竹踊り」  
②合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた合同、③『かりゆし・ゆりまーる』より

いともに、沖縄から未来に平和の風を吹かせた4日間となった。

戦後、アメリカの占領下となった沖縄の祖国復帰運動とむすんだ「沖縄を返せ」の歌をはじめ、1969年には歌劇「沖縄」が制作され、全国上演された。しかし、復帰前の沖縄での公演はできなかった。その

4日間に、4部門(一般職場、女性、親子)の合唱発表会、大音楽会《いちや》にて開かれたおきなわ祭典、45000人満席となつた大音楽会今号から特集。

ホールの中も晴れづきの空も熱い沖縄だった。宜野湾市民会館に早くついたので草花にさそわれて歩いた。クロ木の緑葉、デンギョの浅黄色、日々草のうす紫、ふと見まわすと軍事墓地のそばまで来た。金網に米合衆国海兵隊とかかれた横の門が開いていた。話に聞いていく。基地の外側は白い野菊のよくなサシケサが乱れ咲いている。ガジュマルは根を墓地の中へはり出し、枝は金網の上に続くかのぼして見守っているかのようだ。普段間に続く墓地の中から町やくらしへ見る。墓地の中のタンポポを一本とうてみた。

伊江島へ嘉手納へ、チビリガマへ、平和の礎へ、ひめゆりへ、寸時をおしんで祭典参加者は出かけたことだろう。郷土料理も味わい、五感でじた沖縄はヒロシマへとむかう中でも体内深く宿ったことだろう。いろいろ感じたが一番は沖縄の子どもからおばあまで「なんどうたと踊りのうまいこと」くらしと音舞の一体を再認識。(○)

基地内の車は20台ほど安全が守られるが町へ出ればスピード事故を起す。基地にあらためて怒りを感じた。基地はいろいろな感じた。基地はいつない